

袋井に宿場が設けられたのは元和2(1616)年のこと。徳川幕府が宿駅制度を定めてから15年後のことです。宿間の距離は通常2里余りでしたが、掛川と見付宿間が4里ほどあったため、間に袋井宿が設けられました。

天保14(1843)年の調査によると、宿内の町並みは西端の中川まで5町15間、人口843人、家数は本陣3軒と旅籠屋50軒を含め195軒でした。

江戸、京都どちらから数えても「東海道五十三次」の27宿目の宿であることから「東海道ど真ん中」として、これを観光資源などに活かし、現在まちづくりが行われています。

梅屋敷に看板を贈った林伊太郎は「林鶴梁」の名で知られる、江戸後期から明治期の儒学者、幕臣です。中泉(現磐田市)代官赴任中に起こった安政の大地震の際、領民の救済に尽力するなどの功績をあげました。文章に秀で、書物も残しています。

# 袋井宿の足跡

東海道の宿場町として栄えた江戸時代



## 59 梅屋敷の看板 袋井

昭和57年2月8日  
市指定文化財歴史資料

嘉永6(1853)年から安政5(1858)年まで中泉代官を務めた林伊太郎は、袋井宿の西のはずれにあった小七が営む「梅屋敷」という店が気に入り度々訪れた。伊太郎は「別春居記」という書き物や、「梅花飯類」の看板を贈った。 **非公開。**



## 45 袋井本陣御宿帳 新屋

昭和49年10月24日  
市指定文化財古文書

東(田代)本陣での元和4(1618)年から寛永11(1634)年までの休泊状況が記録されている。 **非公開。**



## 44 袋井宿開設お墨付 袋井

昭和49年10月24日  
市指定文化財古文書

元和2(1616)年に、宿の開設を命じたものである。 **個人蔵/非公開。**

## 58 袋井宿絵図 新屋

昭和53年11月9日  
市指定文化財歴史資料

袋井宿の町並みを描いた絵図で、江戸時代末期ごろに制作されたと推定される。 **非公開。**

